

## 中国の変身（一九九二年）

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

私が初めて北京へ行った時の思い出を述べてみます。それは、1992年1月でした。当時の北京空港は、日本のローカル空港かと錯覚するほど閑散としていました。飛行機は4～5機あるだけでこれが“大中国”の首都、北京の飛行場なのかということぐらいしか記憶に残っていません。

訪中の目的は、私が広告関係で担当していた資生堂が北京の化粧品会社の麗源化粧品会社と合併して立ち上げた資生堂麗源化粧品会社のオープニングセレモニーに参加することでした。

北京空港から市内までは、ポプラ並木が整然と並んだごく普通の一本道。並木の高さが一定しているのは建国時にいっせいに植えたからだ、と想像しながら約1時間。現在のようなハイウェイは想像もできませんでした。

やがて宿泊する中国大飯店に到着し、チェックインです。ところが予約がない！ということで戸惑っていましたがVIP (very important personの略。ホテルの重要顧客)の受付は別のコーナーにあることがわかりました。当時のホテルは20階から上の2～3フロアはVIP用でした。待遇が一般客とはまったく別だということがわかると、共産主義国なのに？との違和感を覚えました。

朝カーテンを開けて「下界」を見るとスモッグがたなびいており、その下を、人民服をきた人々が自転車に乗って続々と工場へ向かう姿が眼に入りました。現在はSOHOやCBD (中央ビジネス地区)というオフィス街として高層ビル群で埋め尽くされていますが、当時は工場が乱立していました。中国大飯店は、その後新築したようです。現在の規

模は、以前の2倍ぐらいの大きさです。建国路にはLGのマークをつけた高層ビルが2棟そびえています。感心していると、慰めるように「国際貿易センタービル」を指差して、あそこには日本の大企業がたくさん入居しています、と。

オープニングセレモニーはこのホテルが会場でした。共産党や北京市の幹部の挨拶が続きました。居並ぶ幹部はそれらしき態度で拍手・拍手。現在のテレビで見る党大会みたいでしたが、中段以降のお客は、そんな挨拶はまったく聞いていません。これも新生中国なのかと納得しました。

セレモニーが終了してから北京最大の繁華街王府井をブラブラと見物しました。ちょうど春節休暇でひと・ひと・ひとでした。百貨店らしき店に入りましたが、店員もお客も髪はオカッパスタイルで紺色の人民服。店員が品物を「放り投げるサマ」を見て愕然とした記憶があります。

店員は公務員、客は農民。客をもてなすなどという気はまったくないのです。品物を買うときは、レジでお金を支払い、レシートをもらい品物と交換してもらうことにもビックリしました。この習慣は今でも続いています。当時は手書きでしたから見てもイライラしたものです。この習慣は百貨店が売り上げを管理するので出店社が売り上げをインチキするのを防止するためのようです。な～るほど・・・と納得。

万里の長城も見学しました。たぶん八達嶺だったと思います。宇宙から見える唯一の建造物\*<sup>1</sup>だそうです。こんな巨大な壁を作った古代の中国人は、ヒトを何だと思っていたのか。すごいというより、ばかばかしいと思ったのが正直な実感でした。エジプトのピラミッドは、直接見たことがありませんが、あれにも同じ気持ちです。ピラミッドは労働者とその家族と一緒に暮らしていたとのことなので、まあ許せるかな。ヒトを人とも思わない古代の中国は、戦後教育を受けた私には理解できないことでした。

\*)2003年、中国初の有人宇宙船「神舟5号」に搭乗した揚利偉が「見えなかった」と言ったので教科書から削除した。(ウィキペディア)

万里の長城の帰途、明十三陵にも立ち寄りました。お墓にはあまり興味がなかったので、誰のお墓か忘れてしまいましたが一箇所だけ見学した記憶があります。22年前の北京は、広い道路の建設途中でした。万里の長城への道すがら、麦藁帽子の農夫が馬車に麦わらを山のように積んでパカパカ歩いていたり、自転車群が車道を埋めていたりする光景しか記憶にありませんでした。

それから10余年後、北京の映像制作会社と付き合うようになり、頻繁に通うことになりました。空港は日本のODAで立派に変身。世界各国の飛行機が並んでいることにビックリしました。空港から市内へはハイウェイができていました。旧街道を探すと市内に向かって右側にそれらしき姿がチラホラ見えました。後日その旧街道を走りたいという運転手は“知らない”とのこと。

さて、北京での仕事は、「制作費を日本の会社が投資して、北京の会社が中国の世界遺産(当時は38箇所)をハイビジョンで撮影する」で、伊藤忠・角川・小学館・ADK(広告)など、それなりに名の知れた会社が名を連ねましたがいくつかトラブルが発生しました。調べてみますと投資をした会社のトップが「中国大好き」であるにも拘らず、担当窓口は興味を持っていないというが分かりました。それがトラブルの原因で、中国側の要望が

伝わりません。そうした事情から私が中国側の代理人として請われたわけです。

日本企業の長所も短所も熟知していますから、相手の弁護士と直接交渉してほぼ”満額回答”。この

時の経験は貴重でした。中国ビジネスのイロハを学びました。完成した世界遺産の番組は北京オリンピック開会式前日までの38日間、CCTVの1チャンネルのゴールデンタイムで放映されました。中国人の誇りを盛り上げることに貢献したと思います。

思い返せば中国の「変身」は、私の短い経験の中でも容易に見て取れます。北京の定宿(東三環路)の窓から下を見ると朝夕のラッシュ時の車の



初めての万里の長城 1992年

行列は日々、目に見えて激しくなりました。行くたびに高層ビルが新築され、“あれっ?”と思うことが度々ありました。

大好きだった四合院も姿を消してしまいました。その変身というか成長の度合いは東京オリンピックのころと同じ。そういえば北京オリンピック、上海万博などを立て続けに実施したことは、まったく日本の後追いです。

一級都市の地下鉄・高速道路やマンション建設が限界に達しつつあり、高成長を支えるのは高速鉄道などの整備が最後の砦ではないでしょうか。その後、話題から消えつつありますが中国版バブルといわれる「理財商品」問題も解消したわけではありません。いいところも悪いところも「日本の後追い」する中国の変身は吉と出るか凶と出るか。よい方向になることを期待したいと思っています。